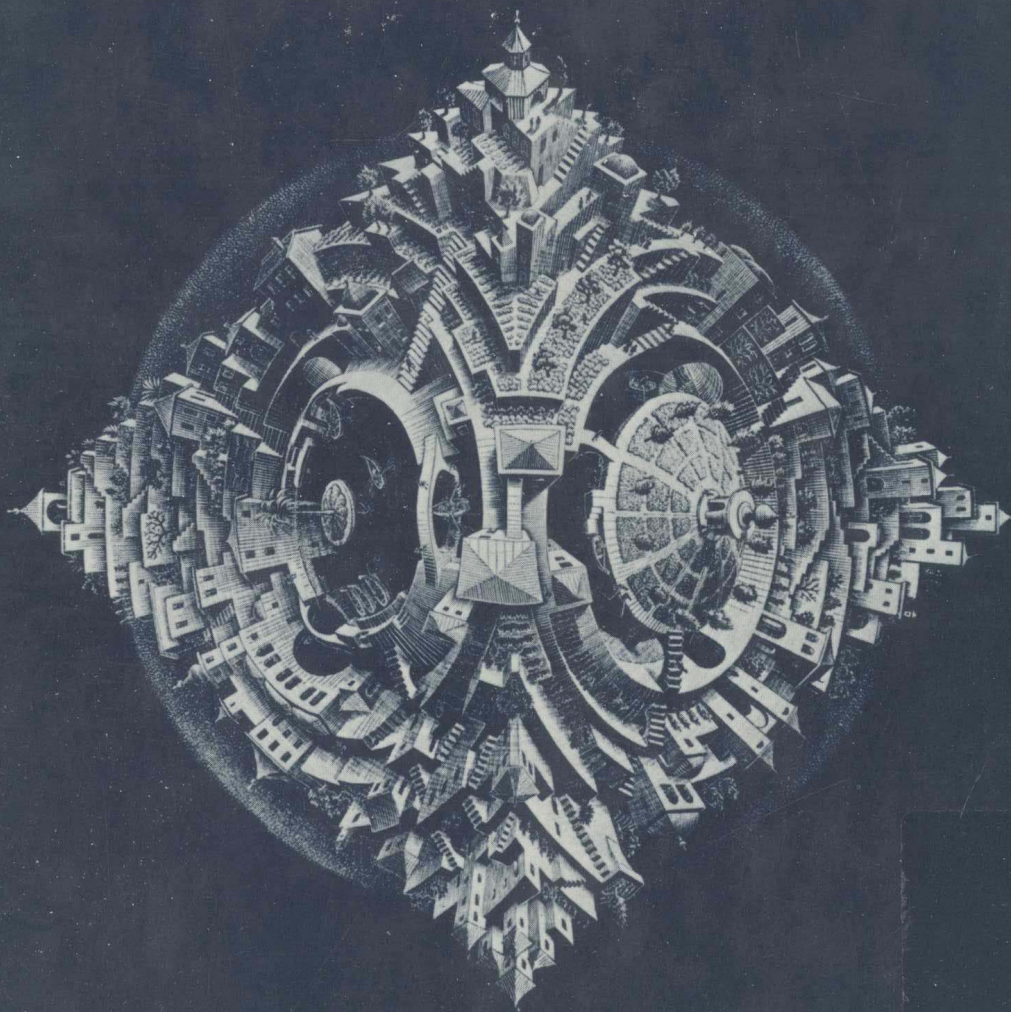


# 都市空間のなかの文学

都市空間のなかの文学

前田 愛



# 都市空間のなかの文学

前田 愛

筑摩書房

前田 愛 (まえだ・あい)

1932年、神奈川県藤沢市に生まれる。  
東京大学文学部国文学科博士課程修了。  
現在、立教大学文学部日本文学科教授。

著 書

- 『幕末・維新期の文学』(法政大学出版局 1972)  
『近代読者の成立』(有精堂 1973)  
『成島柳北』(朝日新聞社 1976)  
『鎖国世界の映像』(読売新聞社 1976)  
『幻景の明治』(朝日新聞社 1978)  
『樋口一葉の世界』(平凡社 1978)  
『明治大正図誌 東京ⅠⅡⅢ』(小木新造・芳賀徹と共編 筑摩書房 1978~79)  
『明治メディア考』(加藤秀俊と共著 中央公論社 1980)  
『現代読者考』(山田宗陸・尾崎秀樹と共著 日本エディタースクール出版部 1982)

都市空間のなかの文学

一九八二年十二月十日 初版第一刷発行

著 者 / 前 田 愛

発行者 / 布川角左衛門

発行者 / 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話東京二九一七六五一(営業)

二九四一六七一一(編集)

振替東京六一四二二三

郵便番号一〇一一九一

印刷 / 精興社 製本 / 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。

都市空間のなかの文学 \* 目次

序

空間のテキスト テキストの空間

5

I

溼東の隠れ家

「春色梅児誉美」

65

開化のパノラマ

「東京新繁昌記」

96

清親の光と闇

118

廃園の精霊

「狐」

125

塔の思想

「佳人之奇遇」

141

獄舎のユートピア

「最暗黒の東京」

164

II

BERLIN 1888

「舞姫」

213

二階の下宿

「浮雲」

250

子どもたちの時間

「たけくらべ」

278

町の声

312

仮象の街

「彼岸過迄」

320

山の手の奥

「門」

339

III

SHANGHAI 1925

「上海」

365

劇場としての浅草

「浅草紅団」

402

焦土の聖性

417

紙のうえの都市

「エーゲ海に捧ぐ」

425

空間の文学へ

「杏子」

442

あとがき

初出一覧

索引

都市空間のなかの文学——文化記号論の試みとして

われわれがわれわれを発見するのは、どこ  
かわからない隠れ場所の中などではない。  
それはものの中のものとして、路の上で、  
街の中で、群衆のさなかにおいてである。

——サルトル「フッサールの現象学の根本理  
念」金井裕訳。



# 序



M. C. ESCHER    *VAULTED STAIRCASE*  
(1931)

## 空間のテキスト テキストの空間

### 1

文学のテキストを読みすすめる過程で読者がつつみこまれて行く「空間」は、どこか夢のなかにあらわれる空間と似たところがある。

作品の世界に没入している間、読者が周囲の現実と交信する意識のスイッチは切られている。そういう状態に入りこむことが理想的な読書であるとすれば、そこに見えてくるのは日常的な意識の輪郭がとけ出して行くあわいにすべりこんでくる夢の世界との微妙なアナロジイである。逆に最後のページを読み終えて本を閉じたときに訪れるのは、夢からの覚醒が誘いたず、あの気恥しさの気分だ。読者がたどるテキストの「空間」は、夢のなかの空間がそうであるように部分的に圧縮されたり、拡大されたりする。読者の身心を締めつける強迫的な空間が、つぎの瞬間には自由な飛翔を約束してくれる開豁な空間に切りかえられる。それは日常的な世界で体験する明視の空間からは遠く隔てられている不条理な「空間」、虚の「空間」であるにちがいないが、にもかかわらず、こ

の虚の「空間」は、テキストの行を追う視線の運動が持続しているかぎり、想像力のはたらしきによって絶えず生気を吹きこまれている。テキストからつくりだされる虚の「空間」のひろがりには、同時にまた読者の想像力のひろがりとその限界を指し示しているのである。とはいえ、じっさいの読書過程では、この虚の「空間」そのものは、むしろ心の視野の周縁部分に押しやられていることが多いだろう。読者が心の視野の中心部に見すえているのは、ふつうは作中人物の心理や行動であり、プロットの展開であるからだ。しかし、〈図〉として志向されている中心部分の意味を限定し、鮮明な像として浮きあがらせているのは、無意識の領域でサブ・ストラクチャーとして構造化されている〈地〉の部分、つまりはテキストの「内空間」なのである。作中人物の生の地平を開示し、限定する枠組として作用しつづけるテキストの「内空間」の役割は意外に見過されている。

文学テキストの読者は、語り手の視点を所有することで、あるいは作中人物が欲望や期待をはらみながら周辺の事物や他の人物にふりむけるまなざしを共有することで、テキストの「内空間」を生きはじめ、たとえば『ボヴァリー夫人』のつぎの場面はどうだろうか。

或る日は彼は三時頃に訪ねて来た。みんな野良へ出かけていた。彼は炊事場へ入って行ったが、はじめはエンマのいるのが眼につかなかった。窓庇が閉めてあったのである。板のすき間を透して、陽の光が細長い線をいくつも石畳の上に引いていた。その線は家具の角に碎け、天井に顛えていた。蠅が食卓の上で、飲み捨てたコップを伝つてのぼり、底に残った林檎酒の中にはまりこんでブンブンいつていた。煙突から射しこむ陽の光が煖炉の蓋の煤を天鵞絨のように見せ、冷い灰をほの蒼白く照していた。窓と煖炉の間でエンマが裁縫をしていた。頸巻をしていないので、露な肩の上に細かい汗の雫が見えた。(伊吹武彦訳)

最初の夫人を急死させたシャルルが何ヶ月ぶりかに、患家先のエンマの家を訪ねる場面である。

暗い炊事場のなかに入ったシャルルは、明るい外光に眼を馴染らしていたために、はじめはエンマの姿に気がつかない。彼が見なかつたエンマの存在を読者があらかじめ教えられるのは、語り手の声によってである。<sup>(1)</sup>ところが、その次のセンチンスからはじまる精密な描写は、知覚をあらわす言葉は省略されているものの、まぎれもなくシャルルの視線にとらえられた室内風景であって、閉じた窓庇、板のすきまからさしこむ陽の光などの点景が時間の順序にしたがって描きだされて行く。円を描いて室内を一巡したシャルルの視線が最後に吸いつけられるのは、エンマのあらわな肩の上にちりばめられた汗の雫である。読者は、エンマの裸の肉と出会ったシャルルのまなざしを共有することで、そのなかにこめられた彼の欲望と期待を了解するのだ。

G・プーレは、語り手の視点と作中人物の視線とを自在に交錯させながら、テキストの「内空間」を拡大させたり、収縮させたりするこうした描法をつぎのように定式化している。「フローベール的方法とは、凝視の対象としてひとつの存在者を提示し、今度はその存在者が周辺の現実を凝視の対象とすることである。《エンマは見る人である。さらに彼女がみるのをわれわれがみつめている人でもある》」（『円環の変貌』岡三郎訳）。炊事場の場面に關する限り、読者は「見る人」としてのシャルルを語り手にみちびかれて見つめている。しかし、同時にシャルルの立場は、やがて「夢見る人」として小説の前景に押し出されてくるエンマを見つめる読者の立場を先取りしていることになるだろう。語り手の冷やかな観察と、とめどなくふくれあがって行くエンマの夢想との落差は、『ボヴァリー夫人』のテキストが織りなしている「内空間」の距離を決定する。語り手の視点を中心とする円と、エンマの夢想のひろがり描きだすもうひとつの円とは、互いに干渉しあいながらテキストの「内空間」

を押しひろげて行くのである。プーレのいうように、小説を中心点の連なりとして構成し、そこからさまざまな対象があらゆる方向に円環を描いて拡散して行くような作品世界をはじめて意識的につくりだした作家はフローベールであった。その明証の一つとしてプーレがあげているのは、フローベール自身のこういふ言葉である。「想像力がある固定した一点から出発してそこから離れることなく、光り輝く円環のなかを駆けめぐるとき、夢想は大きくなれるし、すくなくとも豊饒な憂愁をはぐくむことができる。」

バルメニデスからリルケ、エリオットにいたるまでのほぼ二千年にわたる西欧文学の流れを通観した『円環の変貌』は、もちろんフローベール論で展開されたテクストの「内空間」を賦活する想像力の問題だけでは括りきれない長大な射程をもっている。しかし、さまざまな「変貌」の位相を記述しながらも、円環というトポスそのものから離れることがなかったプーレの発想をつきうごかしていたものは何か。その契機として想定されるのは現象学からの促しである。たとえば、『円環の変貌』に先き立って公けにされた労作『人間の時間の研究』の第二巻『内的距離』は、いかにもジュネーヴ学派にふさわしい言葉で書き起されている。「いかなる思考も、なるほど、すべて何物かについての思考である。思考は不可抗的に、他者に、外部に、向けられる」——フッサールの有名な定式をふまえたこの冒頭から数行をへだててプーレが記した言葉はこうなっている。「しかし、いかなる思考も、同時にまた、単なる一個の思考にすぎない。思考は即自に存在するもの、孤立して存在するもの、心的に存在するものである。」フッサールの定式と併立しているこのデカルト主義の信条告白は私たちを戸惑わせるが、むしろフッサールの志向性とデカルトのコギトに引き裂かれているプーレの矛盾した立場にこそ、彼が解<sup>(2)</sup>析しようとする「内的距離」、ひいては円環のトポスの原点が指し示されているように思われる。夢想するコギトを通じて対象を志向するまなざしを明らかにすること、あるいは外部に向けられたまなざしから逆にコギトを

見定めること。そこにブーレが執着しつづけた「内的距離」の光学や中心と円環の弁証法のもっとも深い意味が託されているのである。

ブーレが提示した円環のトポスは、テキストの「内空間」を解き明して行くうえで有効な概念の一つであるが、ブーレよりもいっそう厳密に現象学の概念にそくしながらテキスト空間の一般理論を構想したのは、R・インガルデンの『文学芸術作品』である。<sup>(3)</sup> 志向性の概念をまなざしや想像力の運動に溶かしこむかたちで円環のトポスを考察したのがブーレであるとするれば、インガルデンの出発点は、空間の「零点」として人間の身体を定位したフッサールの思想に求めることができるだろう。「どの外的知覚もその顕在的な空間現在とその内部におけることという絶対的零点を伴っている。この絶対的零点は、現出上、知覚主体自身の身体の内にある」<sup>(4)</sup>——こういう言葉で身体の唯一性の意識について語っているフッサールにもとづいて、インガルデンはテキストの「内空間」をどのように定義づけようとするのか。

私の身体は生活世界における定位の中心 (Zentrum der Orientierung) として、ここに位置づけられているが、げんに読みすすめている文学テキストに心をうばわれて行くにしたがって、この現実の身体的な定位の中心はしだいに消失し、テキストのなかにある仮構された定位の中心にとってかわられる(そのいずれもまさに「零点」であるがゆえに措定的な意識の対象に上ることはない)。テキスト内の定位の中心は、恒常的な語り手、ないしは複数の登場人物であって、テキストに表現されている事物やそれを含む空間は、この語り手あるいは登場人物を中心に定位された空間として現出する。私はかれらのなかに入りこむことでテキストの「内空間」を生きはじめるのだ。この定位の中心は、テキストの「内空間」の変様とともに変化するだろうし、その逆も成りたつ。

先ほど例にあげた『ボヴァリー夫人』の炊事場の場面についていえば、この「内空間」を定位している「零

点」は、はじめは語り手、ついでシャルルである。しかし、語り手はもちろん、シャルルについても直接的な描写は欠落している。語り手も、シャルルも、読者にとっては見えないし、見ることができない存在である。この場面のシャルルが「見る人」であって、それ以外のなものでもないということとは、とりもなおさず彼がこの「内空間」の定位の中心として、ここに位置づけられていることなのだ。シャルルの視野のなかに入ってくるもの、集合——窓庇、陽の光、石畳、家具、天井、食卓、コップのなかの蠅、煖炉の蓋の上の煤と冷たい灰、そしてエンマの肩——は、それ自体で濃密な気配をこもらせている室内空間のひろがりを指示している。それらのものはばらばらに切りはなされ、孤立しているわけではなく、その上をすべって行くシャルルの視線の統辞法によってひとつに結合される。一方の極では「見る人」としてのシャルルという「零点」に、他方の極ではエンマのあらわな肩という実体をもった点に収斂するのである。

可能なかぎりこの閉された空間を精緻に再現しているフローベールの描写の力に想像力をかきたてられた読者は、シャルルの視野の外にあるもの、つまりはテキストに書かれなかった部分までを見てしまうかもしれない。たとえば、炊事場とはべつにエンマの家にあるほかの部屋、食堂や居間のたたずまいであり、炊事場の暗がりとはうらはらに明るい初夏の陽光がいちめんに降りそそいでいる屋外の田園風景である（コップの底にのこった林檎酒のなかで溺れかけている蠅は、いかにも農家らしい生活を暗示する点景だし、板のすき間をとおして射しこんでくる陽の光は、屋外の明るさへと読者の想像を誘いだす）。言葉を手がかりに非在の世界へとひろがって行くこうした想像力の運動について、サルトルはつぎのようにいっている。

読むとは、とりもなおさず記号にも、とづいて非現実世界との接触を実現することである。この世界には、植



物あり動物あり田野あり街々あり、人間どもが住っている。まずその書物中で問題になっている人物たちと、それから名前もたぬが背景にひそんでいて、この世界のいわば厚味をなしている他の一群の人々と、がある。(たとえば、ある舞踏会についてやされた一章に於いては、作者が一言も触れないが、事実その場にいるはずの《その他大勢》をなす、すべての招かれた客たち。)これらの具体的存在が私の種々な思念の対象となる。それらの非現実的存在こそ私が言葉にみちびかれて行う心的綜合の相関者なのである。(『想像力の

問題』平井啓之訳 一九〇ページ)

ここでいわれている「言葉」と「非現実的存在」の関係を、インガルデンは、テキストに描かれた実空間と描かれなかった実空間の関係から明らかにして行く。エンマが裁縫をしている炊事場は、窓や壁で屋外の空間から切り離されている。さらに描かれた屋内空間と描かれなかった屋外空間というかたちで二重に切り離されている。にもかかわらず、読者の想像力は明るい屋外空間が暗い屋内空間に接続していることに疑いをもたない。というより、炊事場の暗さは、じっさいには描かれていない屋外の田園風景をみだしている明るさとの相関のもとに浮きだしてくるのである。空間のもっとも本質的な属性が切れ目のないこと、連続性にあるとすれば、テキストの「内空間」にもこの属性はあてはまる。私たちは言葉によって視覚的には切れ目なく続く連続体＝空間を意味のあるさまざまな部分に切り分けるが、同時にまた想像力のはたらきによってそれらの部分をもういちど結びあわせ、連続性をとりもどす。言葉の切るはたらきは結ぶはたらきを潜在させているわけであり、見えない空間は見える空間につながっているのである。

この描かれた空間と描かれなかった空間の関係を明らかにした上で、インガルデンが考察の対象としてとりあ